

この地は、アラミアとしたいように思う。

紅葉の翻案をめぐる比較文学研究が、著者の功績によってまた盛り上がりを見せていることは、酒井美紀『尾崎紅葉と翻案—その方法から読み解く「近代」の具現と限界』(花書院、二〇一〇年) などからも明らかだろう。ブレイムの著作をはじめとする英米の廉価版小説と日本近代文学との関わりは、まだ解明されていない点の多い重要なテーマであるが、本書では「無名で平凡な読み捨て本として埋没する原作(一一六頁)」と記されるに留まるブレイムの作品の再評価、ということも含めて、この分野の第一人者としての著者の、さらなる研究成果の刊行を心待ちにする次第である。

橋本恭子著

『華麗島文学志』とその時代

—比較文学者島田謹二の台湾体験—

(三元社、二〇一〇)

佐野 正人

五〇〇ページを超える著書であるが、密度の高い検討と思索が重ねられていて、著者のこの研究に掛けた労力と情熱がひしひしと伝わってくる著書である。またそれ以上に重要なのは、この書が「比較文学」という学問^{ディシプリン}についての愛情に裏打ちされた自己省察ともなっていて、「比較文学」という学問がどのようなにして戦間期のヨーロッパで学問的な体系を整え、それが一九三〇年代の日本で、あるいは島田謹二のいた台湾で受容され、さらに戦後の「比較文学」にまで繋がっているかという学問史的な省察を大きなテーマとしているため、読者個々人の学問的な省察を促すという点で、きわめて刺激的な著書となっている。

もちろんこの著書の主要な対象は、台湾時代の島田謹二が「比較文学」という学問を受容して東アジアにおける「比較文学」を立ち上げた経緯にあり、その日本派比較文学の成果と

としての『華麗島文学志』の精密な読みが中心となっているわけだが、その作業は東アジアという地においてヨーロッパ生まれの「比較文学」という学問を受容されて、島田謹二という「比較文学者」が生まれていくという学問をめぐるドラマの再検討という性格を持つてくる。島田謹二が台湾において「比較文学」という学問を受容し、『華麗島文学志』などの学問的実践を行ったことは、日本における「比較文学」という学問の本格的な意味における出発と言ってもいいものであるため、それが台湾という地において立ち上げられていく経緯は、「比較文学」という学問の出発をめぐるドラマとなりえているのである。

ただこの『華麗島文学志』をめぐる学問的なドラマは、序章で述べられているようにこれまで学界において本格的に扱われてこなかったという「沈黙」の中にあった。橋本氏は「本研究の出発点には、こうした『華麗島文学志』と島田の台湾体験をめぐる深い沈黙がある」(p.19)と述べているが、この島田謹二の『華麗島文学志』というテキストが含まれていた政治的・イデオロギー的な性格はむしろ台湾の文学史研究の中において問題化され、柳書琴や陳建忠などといった研究者によって批判を受けられることで、この「沈黙」の持つていた意味が逆に照射されることになったと言える。つまり、島田謹二の『華麗島文学志』

という日本における「比較文学」の出発点にあったテキストの持つていた問題は、台湾の文学史研究という文脈との接触の中で明らかになったのである。このことはたいへん興味深いことにも思われる。

島田謹二の『華麗島文学志』というテキストが長いこと日本の学界において「沈黙」にさらされていたのには、このテキストが「外地」の帝国大学において、主に「外地」において生み出された日本語テキストを対象にして書かれたという事情が関わっている。この「外地」で生まれたテキストという意味を正面から考察し、検討することは戦後の日本の学界においてはきわめて困難な作業であった。なぜならそこには「外地」という空間や、「外地」に暮らす日本人の置かれたコンテキスト、そして「外地」における帝国大学の持つていたコンテキスト、また日本の植民地主義に対する総括などの多くの問題が錯綜しており、それらを正面から検討することなしには『華麗島文学志』というテキストの内実を明らかにすることは困難だったからである。そのような「外地」やそこで生まれたテキスト、また「外地」で暮らした日本人たちに関わる問題を正面から検討することなしに、戦後の学界は長く過ごしてきた。先に触れた「沈黙」とはだからある意味では戦後のタブーに触れるような敏感な領域であることを示していたものだったろう。

このような敏感な領域が、台湾の文学研究者によって問題化され、提示されたことはその意味でも示唆的であり、二十一世紀の文学研究のコンテキストを示すものだったと言ってもいいだろう。そしてその台湾の文学研究者の批判を受け止め、先にあげた数々の問い——「外地」において生まれたテクストの持つている意味、「外地」の帝国大学教授というコンテクストの意味、「外地」に暮らす日本人のコンテキストなど——を正面から取り上げ応答しようとした所に、この橋本恭子氏の『華麗島文学志』とその時代』という著書の持つ二十一世紀の文学研究の課題に答えようとした倫理的な真摯さともいえるべきものは際立っている。先に述べた学界の「沈黙」に独力で対峙し、戦後のタブーに触れるような領域に正面から向き合おうとしていると言えるからである。

このような数々の問いに正面から答えようとする作業は、それゆえ日本の植民地としての「台湾」の歴史的なコンテクストの再検討からそこにおいて生み出されたテクストの微視的な精^{チカラ}までを含んだ全体的な考察を必要とするものとなる。例えば第三章「華麗島文学志」とその時代——郷土化・戦争・南進化」では、一九三〇年代後半の台湾の歴史的な文脈が丁寧に掘り起こされ、その地で暮らしていた在日日本人の定住化というコンテキストが焦点化されている。島田謹二自らも永住を

決意した定住化・郷土化という流れの中で、台湾における日本語文学の検討というコミットメントが行われていったことが説得力をもって描かれる。

一章において第五章「四〇年代台湾文壇における『華麗島文学志』」では一九四〇年代の台湾のコンテキストが扱われ、三〇年代とは異なって『文芸台湾』発刊および台湾文芸家協会の設立によって日本人と台湾人を包括した文壇情勢が生まれていたこと、そこにおいて「台湾文学」のヘゲモニーをめぐつての闘争が生まれ、それが島田の論文の受容においても大きな影響を及ぼしたことが描かれている。特に第四節「『台湾文学』の定義と『文学史』観をめぐる議論」においては、島田の「外地文学史」と彼の弟子であった黄得時によるその批判としての「台湾文学史」とが、文学的ヘゲモニーをめぐる争いであったことがよく窺えてきわめて興味深い。橋本氏の文章によれば、「文学史を立ち上げるということは、ナショナル・ヒストリーを構築することであり、その意味で彼らの『外地文学史』と『台湾文学史』は、台湾を代表する文学の正統性を巡る支配者と被支配者の闘争であったといえよう。」(p. 16)と述べられており、このことは『華麗島文学志』というテクストが持つていた政治的コンテキストと含意が象徴されている部分だと考えられる。

一方で、それらの歴史的コンテキストの検討には含まれた第

四章「『外地文学論』の形成過程」、第六章「太平洋戦争前後の島田謹二——ナショナルリズムと郷愁」の章においては、『華麗島文学志』のテクストに即して彼の「外地文学論」が生まれ行つた経緯とその性格について再検討が行われている。いわば『華麗島文学志』というテクストの精^{チカラ}が行われている部分だとも言うべきだろう。例えば第四章では「エグゾティスム」をめぐつての精^{チカラ}が行われているが、そこで明らかにするのはフランスの先行研究での「エグゾティスム」とも異なり、また日本近代詩の「エグゾティスム」——白秋や李太郎の自己異化的なエグゾティスム——を經由しながら、また台湾での文学的実践の中から生まれてきたコンテキストをも踏まえているという複合的な「エグゾティスム」のあり方であった。似非エグゾティスムを批判するエグゾティスムのあるべき姿をそこに橋本氏は読み込んでいるが、そのような複合的なあり方を持つているために後に島田謹二によるエグゾティスムの提唱を多く議論を引き起こすことになったのもあった。このよ

ついで橋本氏は様々な層位を通じて接近している。そこに見出されるのは、「差別主義的な支配者であると同時に、敗者として台湾落ちした一段劣つた日本人という二律背反を生きざるをえなかった」在日日本人の「宿命」(p. 16)であり、台湾における日本語文学に通底している「鬱々とした暗さ」の影であった。この「郷愁」をめぐる部分は島田謹二の個人的な自己投影であるばかりでなく、在日日本人という植民者グループの直面せざるをえなかった「鬱悶」をあぶりだして興味深い。また、逆に定住化が進み、台湾出生の二世が生まれ始めていた当時に逆の形で「郷愁」つまり内地に対して現地へ向かうベクトルの「郷愁」も生まれ始めていたことも指摘されている。このように精^{チカラ}読を行う章においては、テクストの多義的な層位についての検討が行われていて、テクストをコンテクストに向かつて開いていく著者の姿勢がよく現れている部分と言えるだろう。

は扱われている。

以上のような歴史的コンテキストを扱った章と、テクストの精読を行う章とが交互に組み合わさつて、一つの植民地期「台湾」をめぐる全体的な研究という印象を与えるものとなつていく。言い換えれば国際関係や当時の社会構造から、学問の受容と主体化という比較文学的影響研究を経て、島田謹二個人の面や、テクストの精^{チカラ}読までを包括した全体的研究と言

うるものである。また、強調すべきなのは一九三〇年代において島田謹二が出会いそなつた部分が、この橋本恭子氏の著書においては充填されその空白が埋められている点である。日本派比較文学の確立を志向しながら、目の前にいる台湾人と交流し彼らから学ぶことをしなかつた島田謹二の「空白」は、この橋本恭子氏の学問的实践によつて乗り越えられている。台湾の文学研究者との交流から生まれ出たこのような橋本氏の学問的实践は、二十一世紀東アジアでの比較文学という学問のあるべき姿を予示するものとしてわれわれ比較文学研究者たちに大きなインスピレーションを与えるものであるだろう。

前野みち子著

『恋愛結婚の成立』

—近世ヨーロッパにおける女性観の変容—

(名古屋大学出版会 二〇〇六年)

仙葉 豊

本書は、タイトルの示すように、十五世紀から十七世紀までのドイツ・フランス・オランダを中心とした大陸諸国での、恋愛による結婚と女性観の変遷を、文学はもちろん絵画やエンブレム、さらには諺や民衆歌など広範囲にわたる資料にあたりながら縦横に論じたものである。

まず、本書の構成を知るために、目次の概略を見ておこう。

第I編 描かれたラブレター

- 第一章 手紙とオランダ社会
- 第二章 オランダのラブレター
- 第三章 フランスの書簡マニユアルと宮廷社会
- 第四章 情念論とのつながり
- 第五章 十七世紀オランダの娘たちと恋

第II編 恋と〈毀れ瓶〉

第一章 〈毀れ瓶〉の起源

第二章 豊饒の瓶——古代の瓶の再生と存続

第三章 〈毀れ瓶〉と世間——中世後期の恋の歌

第四章 十六世紀の〈毀れ瓶〉

第五章 〈毀れ瓶〉の変容——嘲笑から警告へ

第III編 結婚と人生段階図

第一章 中世都市民の人生観と女性観

第二章 イギリス民衆詩人の人生モラル

第三章 中世末の人生段階図と〈死の舞踏〉

第四章 エラスムスとヴィーヴエスの結婚観

第五章 男性と女性の人生段階図

第I編は、フェルメール、ヤン・ステーン、G・テル・ポルフなどの十七世紀オランダの風俗画の中に登場する、手紙を書く人物や手紙を読む人物に焦点をあてながら、その手紙が恋文であることを基本的な切り口にして、当時のオランダ市民階級の新しい恋愛観を浮き彫りにしている。人を好きになることが恋愛感情であるとするならば、それは、いつの時代にもあったものだ。ただ、近代社会における結婚へと進んでいく恋愛感情というものは、著者が言うように、ジェイン・オースティンの小説に書かれたような、両親や後見人たちの配慮と監視の場の

下に、若者たちが好意を抱きあい、そしてそれが結婚という制度的な帰結を迎えるという物語が出現するまではなかなか見られなかつたものだ。恋愛から結婚へとという経緯が当人や家族の合意として社会的に承認され、ある意味では、文化の型として成立した時点で、「恋愛結婚」が成立したといえるだろう。このような恋愛と結婚のパターンは、オースティンから一世紀ほど時間を遡ったオランダの十七世紀市民階級のラブレターの流にその端緒が見出せると著者はいう。フランスにおいては、宮廷恋愛風なラブレターの書き方がマニユアルのように定型化するのに対して、オランダでは逆に、日常生活での素直な感情の発露がむしろ喜ばれることになる。狂気にまでいたりかねない危険な情念が理性によつて馴致されていくともいえるだろう。中世における女性蔑視や女性嫌悪、そして、上流階級の男性の側での結婚嫌悪が緩やかに解消されていく過程が、ラブレターという一連のトピックの分析によつてみてことに浮き彫りにされている。

第II編では、中世以来、失われた処女性の寓意として知られている「毀れ瓶」のイメージの生成と変容が、エンブレムと民衆歌を数多く引用しながら丁寧に例証されている。恋愛の落とし穴とも言うべきこのような図像は、時間が下つた十八・十九世紀に、グルーズの絵画やクライストの喜劇にまでその影響が